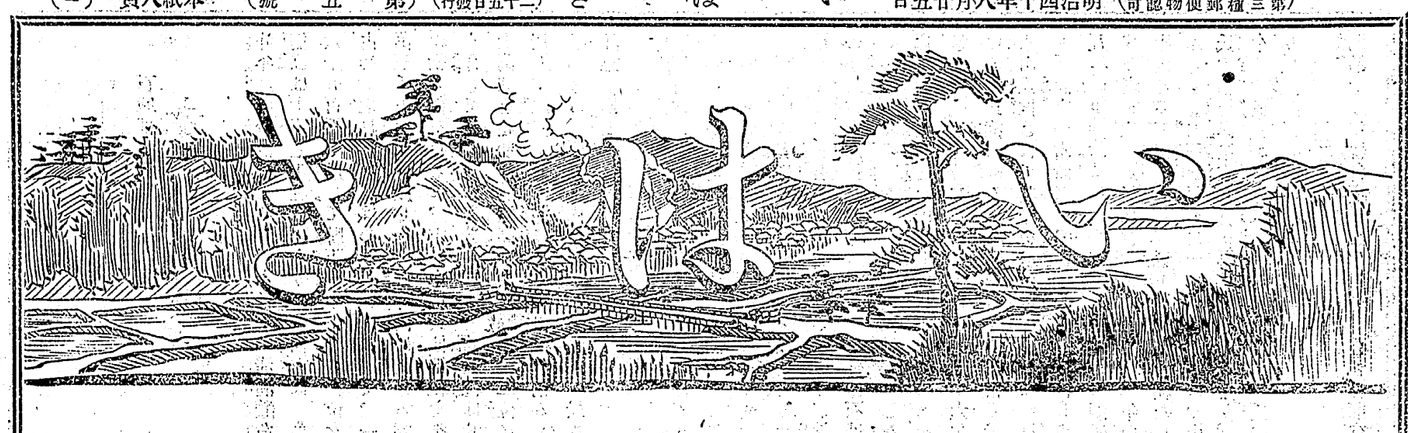

社告

◎前號の社告に掲げしが如く、本社は舊平藩主安藤信正公の詳傳を編みて、幕末に於ける大偉人の寃を雪ぎ、其德を頌するの義務あるを確信す、蓋し公の如きは國家的偉人にして、單に地方人のみの誇りとすべきにはあらず、然れども親しく大恩を蒙り、久しく德風に親炙したる地方人に殊に深緣を有するが故に、本社は先づ此機關を利用して、恩に酬ゐ靈を慰むるの義務を果さんと欲す。當時公の殊遇恩顧を受けられたる諸君は勿論、父祖に聞き先輩に尋ねて、公に關するの事蹟を知らる、諸君は、本社の微衷を諒して、此舉の成就に翼贊せられんことを切望す。

◎本社は又地方出身に係る人物の。逸話、奇譚をも掲げて讀者諸君と共に先輩の流風餘韻を偲ばんと欲すれば古人と今人とを問はず男子と女子とを論ぜず、苟も一擧動一言語の後昆に傳ふべきものあらば、事の細大となく記して遺られんことを乞ふ。

◎本社は地方に於ける青年諸君の事業に對しては、殊更に深厚なる同情を有するものなれば、青年會等にて本誌の働きを要する事あらば、遠慮なく申込まれたし。强固なる青年團體を設置せんことは、本社同人の素願にして、本誌の一部を割いて青年活動の機關に充つるが如きは、同人の最も快とする所なり。

◎本月よりは月二回發行として、讀者諸君の希望にそはん考にて、既に其準備をなしたれども、印刷所に支障ありて所志を決行する能はざるは實に遺憾なり、然れども近き將來には適當なる方法を設けて、當に月二回のみならず、三回四回の發行をなし以て地方開發の任を盡さんと欲すれば、時期の至る迄暫く御待ちあらんことを望む。

主張

平町民の品格

品　峯生

客月廿三日の夜、江原田川兩氏の演說を聽かんと欲して聚樂館に往く。兩氏の博識と熱誠とは、深き感動を聽衆に與ひたるが、殊に痛切なる刺激を吾人に感せしめたるは會場に於ける聽衆の行動なり――熱誠を以て演說する者に對し、醜惡卑陋聞くに堪へざる惡言毒舌を放ちて、場內の秩序を紊り、果は警官の制止を受くるに至る。該演說會の主眼とせし所は、排娼の輿論を喚起せんとするにあれば、主義理想の上より反對なる意見を有する人々の、聽衆中に少からざるべきは吾人の當初より信ぜし所にして、又熱情に富める者の中には、過激なる批評を試みんとする者の一二あるべしとは、豫期せしかども、苟も名家の演說を聽き、其趣旨を理解するの能力を有する平町民中に、禮容節度なく、野獸の如く狂叫する者の多くを見たるは、實に吾人の意外せざる所なり。

禮儀の完整を誇りとする支那人をして、東海亦此の君子國あるかと驚嘆せしめたる程禮儀を尊重せるは古來我國の習慣なり。講學修道の席はもとより、遊戲娛樂の際に於ても、甚だしきは軍陣亂戰の中に在りても決して禮儀を紊さざるの美風は、日本武士道の精華煥發して茲に至れるものにして、士人の面目品格は一に嚴正優雅なる禮容に依りて保たれ、誤て禮を失し品格を損する事あれば、卿服以て漸く最後の面目を維持せる、悲壯痛烈なる實例は戰せて多く青史の示す所なり。

ミルは世界に名を知られたる英國の大人物なるが、一夕某の勞働團體より招かれて演說會に出づ、會衆の着席終るを見、起てミルを一同に紹介したる司會者が、將に壇を下らんとする時、突如として勞働會幹事の一人は壇下に進み出で、徐ろに口を開いて曰く、吾等はミル先生の高說を拜聽する前に確めたき一事あり、先生は曾て某所に於て、英國の勞働者は世界中最も愚昧嗜惡なりと斷言せられしと聞きしが果して事實なりや、若し事實なりとせば現在も尚當時の如き意見を有せらるゝや、將た前說を改められたりや如何と、之を聞ける司會者は事の成行を恐れて戰慄し、曰く所を知らざりしに、其事は予自ら說明せんとて登壇せるミル氏は、極めて明晰なる語句を用ひて、然り予の英國勞働者を世界中最も愚昧者なりといへるは事實なり、而して現時も而か思へりと答ふるや、數千人の勞働者は怒濤の如き拍手喝采を以てミル氏に酬ひ、最も靜肅に氏の演說を傾聽し、一人だも妨害すること無かりしは、曾て吾人の福島に在りし日、博士新渡戶氏より聞きて、頗る興深く感じ、今日に至るもなほ忘るゝ能はざる所、近く聚樂館に於ける矯風演說會と相對照して、感慨一層多し。

彼は下等の勞働者にして、此れは中流以上の紳士なり、而して彼には禮儀あり品格ありて、此れには粗野と鄙陋とあり、彼は自己を愚昧なりと評せられて喝采するに、此れは一言の誹ゆも受けず、たゞ正言讜議の己が耳に快からざる故を以て、惡罵怒號を逞しうす。工業の勃興商業の繁盛を以て東北の第一位を占むるも、町民の品格無き雅量なき事此の如くんば、永遠に大都たるの面目を發揮すること能はざるべし。

不謹愼にして粗野、紳士の體面を顧慮せざるは天下單に平町民のみには非ず、堂々たる代議士にして、神聖なる議院內に於てすら、車夫馬丁の如き惡言を放ちて疾しとせざる者ある今日なれども、特に吾人は己が鄉里を愛すること切なるが故に、此の不遜の辭を以て、一部町民の反省を促がすものなり。

新聞雜誌社廣告料金表

「いはき」雜誌特約販賣致候ニ付御注文被下度候

東京市京橋區南八丁堀一丁目二十六番地　振替貯金口座七四壹

定價一部金五錢　外ニ郵稅五厘

廣告料　五號活字十九字詰　壹行金拾五錢

編輯人　高木朝重

發行人　吉田禮次郎

印刷人　高城寬雄

發行所　いはき社

福島縣石城郡平町

目下縣社の下に工場の新築をして居る平鐵工場は斯道に造詣の深い由村工長が卅餘名の職工徒弟を督勵して有らゆる金屬器械類の製造修繕をやって居るが注文が非常に多いので頗る多忙を極めつゝある。

○橋本礦業商議所（田町）

橋本旭氏は九州臺灣の諸炭礦及び入山越賀盤城等の諸炭礦にても技術監督の職に在て礦業には經驗豐かなる人なるが先月中より商議所を開いて礦山の鑑定測量製圖礦業施業案の調製礦山設計礦山用品礦區賣買の

小泉石材營業所

磐城平町新川町

長　黑木房教

主任　自土龜吉

釜屋欠太郎

人物評論

石城郡酒造組合長

永山泉七郎氏

（一）

昨年度の統計によれば、本縣下の醸酒醸造總高は十萬七千五百に上り、若松市は一萬六千五百石を產して縣下郡市中の第一位を占め、之れに次ぐはわが石城郡にして、一萬三千五百石を產せり。又郡内に於ける國稅納入額を見るに、市街宅地其他地租を悉く合して廿萬圓に過ぎざるに、酒造稅は廿七萬圓を超ゆ。釀造高に於て縣内第二位に居り、地租よりも遙に多くの租稅を納る酒造業は、石城郡内に於かる事業中、最も注意を拂ふべきものゝ一たり。

（二）

石城郡内にて、今日酒造業を營む者は五十三名なるが、是等の人々は、明治三十二年酒造組合に關する勅令の發布せらるゝや、他郡の同業者に卒先して組合を設けたり。而して最初組合長に選まれたるは、小名濱の小野定太郎氏なりしも、氏が居住は石城の中心たる平町を距ること甚だ遠かりしを以て、副組合長永山泉七郎氏、專ら事務を執りて毫も遺算なからしめたり。三十六年中小野氏病の故を以て職を辭するに當り、永山氏推されて其後を承け以て今日に至れり。設立の當時には組合は有名無實にして互に競爭排擠せしため、損失を招きて倒產する者を生ずるが如き狀態なりしが、今や堅固なる基礎を有し、縣下斯業界の覇たらんとする盛運を見るに至れるは、實に永山氏の指導誘策宜しきを得たるによるなり。今ヲ平岡氏が特に木盃一組を賜ひて、氏の功に酬ひたる誠に故あり。

（三）

明治十六年縣會議員となるや、心を各郡貧富變化の狀態に寄せ、耶麻郡が縣下第一の貧郡より、漸く進で他郡を拔き、伊達郡の富が常に最高度に在る原因を蠶業の發達に在りと觀じたる氏は、石城にも養蠶を勃興せしめんと欲し、自ら信夫郡に住て學ぶこと三年の後、十九年始めて養蠶を試みたるに頗る好結果を得たるに依り、時の郡長白井遠平氏の贊成を受け、信越地方に赴きて調査を遂けたる上、工女百數十名を有する製糸組合を起せしが、市場の變動劇しきため、損失相尋で來りしかば、蠶糸業は收支償はざるを以て、廢業する者漸く多く、組合も亦解散するに至りぬ。氏は己が主唱したる事業が失敗に歸し、却て地方の損失を致したるを甚く憂ひ、七年の間交際を避けて專心研鑽を務め、如何にもして地方に適當なる蠶業方法を發見せんとしたるも、時期到らず遂に目的の達し得ざるを以て中止し、談再び蠶糸に及ばずといふ。氏の事業は成功せざりしも、地方開發の熱心と、責任を重ずるの精神とに到りては、實に好簡の教訓として永遠に亡びざるべし。

（四）

氏は明治二年、谷川瀨村の名主となりしより、爾來一日も公務と離れることなく、二年には戶長に任せられ、十六年には縣會議員に選まれ、或は勸業委員となり學務委員となり、郡連合會議員となり、酒造組合長となりて、四十年一日の如く公共事業に盡瘁し來れり。氏の性質實を愛して浮華を忌み、事に當りては熱心寢食を忘る。其事業は華々しからざるも、堅固なる根底を有し、餘榮永く後代に及ぶもの多し。

（五）

氏は至誠と實行との軌道上を、一直線に進行し來れるが故に、經歷は平凡他奇なきが如くなるも、天保六年五月呱々の聲を擧げてより今日に至る七十有三年間、健全なる常識を持し、憂世愛民の至情に動き、徐に而も撓まず捲まず、向上發展を連續し來れる所、當世稀に見るの君子人なり。氏が常に壁間に掲げて、服膺實行せんとするものは『朱子家訓』なり。

父之所貴者慈也、子之所貴者孝也。君之所貴者仁也、臣之所貴者忠也、兄之所貴者愛也、弟之所貴者敬也、夫之所貴者和也、婦之所貴者柔也、事師長貴乎禮也、交朋友貴乎信也、見老者敬之、見幼者愛之、有德者年雖下於我我必尊之、不有者雖高於我我必遠之、愼勿談人之短、切勿於己之長、讐將以義解之、怨者以直報之、人有小過含容忍之、人有大過以理而責之、勿以善小而不爲、勿以惡小而爲之、人有惡則掩之、人有善揚之、處公無私讐、治家無私法、勿損人而利己、勿妬賢而嫉能、勿逞忿以報横逆、勿非理以害物命

不義之財勿取、過合義之事則從、詩書不可不學、禮義不可不知、子孫不可不教、奴僕不可不恤、守我之分者理也、聽我之命者天也、人能如是、天必相之、此乃日用常行之道、若衣服之於身體、若飲食之於口腹、不可一日無也、可不愼哉。

氏は自ら之を實行するのみならず、親族をして有德有道の家庭をつくらしめんとして書して廣く分ち居れり。溫恭謙讓の氏は多く語らざれども、桃李の下自ら蹊をなすが如く鄉黨里人皆氏に習ふて敦厚淳朴の風大に欽すべきものあり。

（六）

吾人は茲に筆を擱くに當り、現代學界の重鎭として海内に喧傳せらるゝ碩儒鈎軒大須賀履氏の篇せる、永山氏肖像の贊を掲げん。

方瞳蒙眉、靄相見面、是爲永翁、
請述小傳。翁性素樸、不喜驕奢、
紹述祖業、儉勤齊家。王政復古、
受命區長、制度革新、職務鞅掌、
首殖農產、奬勵養蠶、兼講水利、
流渠開塘。郡會縣會、選爲議員、
公共事業、無不率先、用必養材、
捐貲鄉校、鄉以孝悌、頗裨風敎。
釀戶有保、推長一人、自翁爲長、
造酒皆醇、神嘗大典、命獻供御、
億兆黎民、爭榮此譽、積年功勞、
官廳褒賜、鄉望所歸、不止農事。
誰謂天高、天低鑒臨、錫之壽福、
如山如林。夫妻老健、和合琴瑟、
玆舉金婚、芝蘭滿堂、藹々祥烟、
水明山紫、翁之所居、實是仁里、
余同桑梓、久欽翁風、文無諛語、
庶贊翁功。

本校ハ女子ニ裁縫其他須要ナル智識技藝ヲ教授ス
私立平陽裁縫女學校
何時ニテモ臨時入學ヲ許ス

眼病者及小兒、學校生徒及壯丁渡航者ノ診察及眼部健康診斷及貧民トラホーム患者施療及眼病者職業ノ選擇等凡テ眼部衛生上ニ就テ一切ノ相談ニ應ス
診療時間　自午前九時　午後五時迄
醫科大學選科卒業
賀澤忠治

○トラホーム症ハ決シテ不治ノ病ニアラズ、早期正確ノ診療ヲ怠リ適當ノ所置ヲ加ヘズシテ重症不治ニ陷ル、如斯シテトラホームハ次第ニ蔓延ス、之レ一ニ患者不注意ノミナラズ醫師モ亦一分ノ責ナキ克ハズ、己ニ内務省令出デ、世人マスマス其恐ルベキヲ知ル、患者ノ幸福ト豫防要旨ハ早期正確ノ診療ヲ勵行スルニアリ矣、
石城郡平町字南町
賀澤眼科院

洋物　流行品
平　石川商店
貳　叶屋
ガ問場

地方研究

磐城怪火 閼伽井嶽の龍燈

磐城中學校教諭　岡田毅三郎

第二章　閼伽井嶽

磐城平野の中央部より稍々西方に當りて、海拔七百二十米突に達する山嶽あり、之を閼伽井嶽と稱す。石城郡赤井、好間、箕輪三村の境に屹立し、北方水石山と相連りて一連の山脈をなす、閼伽井嶽は其嶺頭に在り。西方狹隘なる低地を隔てゝ湯の嶽と相對するの外、山嶽丘陵の目を遮るものなく、四方開豁にして眺矚を恣にすることを得べし。山高きに非ざるも平野の間に屹立せるを以て、山上に登れば眼下に磐城平野を臨み、山川田野村落等總て一眸の中に在りて、歴々指點するを得べきのみならず、遠くは渺茫たる太平洋を臨み、近光遠景濃淡相重り、風光雄大誠に景勝の地なり。又山上には寺院及び藥師堂あり、郎内廣濶にして老樹四周を圍み、樓堂塔碑整然として相並び、壯麗幽邃の一靈場なり。

藥師堂

閼伽井嶽の寺院及び藥師堂等は、絶頂より稍々下方に當り、東南に面せる平坦の所に在り、大同元年德一大師の建立にして、磐城三藥師の一なり。本堂は瑠璃光堂と稱し、西向き六間四面にして、規模宏大結構壯麗なる一大伽藍なり。本堂の西北に連りて、別當常福寺及び庫裏等あり。境内廣濶にして堂宇樓門整然と相並べり、此等の建築物は、もと閼伽井岳の絶頂に在りしが、常に風烈くして住居する能はざるを以て、其後に至り今の所に移せしものなりといふ。此藥師堂には藥師如來を奉安し、靈驗顯著なるを以て參詣の客四時絶えずといふ。今鍋田晶山編の磐城志によりて、藥師の緣起を示せば左の如し。

藥師如來は、源海阿闍梨唐國より齎し來りて、大和國瑠璃光山醫王寺に安置せし所の、三國傳來の靈佛なりといふ。其後九年を經て、天平六甲戌歳唐國大に疫病流行す、源海の弟子源觀此事を聞き傳へ、彼如來を奉持し來りて、當山絶頂峯ヶ峯（今堂平）に堂宇を創建し、彼尊像を安置すといふ、又其時書寫の經文を絶頂に埋む、今經塚峠といふは是なり。其後六十餘年を經て、德一大師彼峰に詣でしに、堂宇破壞すと雖も本尊靈驗猶新なるを感ず、然るに彼峰高秀雲を凌ぎ、常に西北風の難を免れず、是に於て大師四方を歴覽し、堂地を今の處に卜し、以て堂舍を修造せり、實に大同元丙戌年の開山なり、誠に日域無雙の靈佛堂國無比の名嶽なり。

常福寺

寺は水晶山常福寺と稱し、眞言宗藥王寺の末刹なり、桁行九間梁間七間、規模宏壯の寺院にして、庫裏は本寺と軒を並べ、桁行十七間梁間十間餘二層の大厦に、五間の曲屋付なり、來客饗應等は總て此庫裏に於て取扱ふものなり。寺格は眞言宗藥王寺の末刹なりしが、二十六代住職法眼師、文政年中堂宇を再建し、寺格も昇進し嵯峨御所御祈願所仰付らる、明治二十六年現住職旭純榮師の代に至り、藥王寺の末寺を脫し、更に大本山京都智積院の直末寺となれり。明治三十一年七月に至り、更に別格本山に昇格せりといふ。

藥師の例祭

閼伽井嶽の藥師如來は、靈驗顯著なることは夙に世人の信仰する所となりしを以て、平時に於ても參詣するもの四時絶えざるのみならず、中には心願をかけ日參月參をなすもの少なからず、此等の參詣者は多くは眼病の祈願、安產の護摩燒き、火盜難、當り事除けの守札等を希ふものなり。陰曆正月及び七月の晦日は藥師の例祭なるを以て、諸國より多數の參詣者群集せり。其中七月の晦日は正月よりも一層賑なり、此例祭には白川（會津、三本松、相馬等、岩磐兩國の人士は勿論、南は關東地方より北は陸羽地方に至るまで、多數の信者群集して、庫裏客殿に居餘り、廊下外椽まで詰合ひ、果ては岩角樹蔭等に通夜するもの非常に多かりしが、近年に至りては此等の參詣者も漸次減少すといふ。

磐城古事記（二）

平町　椎名梅里

好間殿と稱したる六代目師隆公の嫡男を隆行公とし、夫より朝義、常朝、清胤、隆忠、親隆、常隆、由隆、重隆の諸公代々相繼ぎ重隆の嫡男左京太夫常隆公、千丈嶽太田山に城を築きて之に居りしが、天正十八年七月廿二日相州小田原に出陣の際鎌倉星ヶ谷に於て戰死す、公實子なきにより水戸太田の城主佐竹義重公の三男にて、當時八歳なりけるを迎て養子とし、白土攝津守之を補佐す、後家統を繼ぐや忠治郎貞隆と號し、元和六年十月十九日武州淺草に於て卒さ、嫡子重隆公は水戸佐竹家と共に石田三成と心を合せ、慶長五年八月朔日伏見城を攻めて之を陷れ、城將鳥居元忠終に戰死す。然るに關ヶ原の一戰大坂方の敗北となりしにより、岩城佐竹の二公も退陣歸國せり、同年霜月佐竹公は水戸百廿五萬石を召上げられ、廿五萬に石て出羽秋田郡久保田へ所領替となり、岩城公も廿五萬石を召上げられ二萬石にて出羽龜田に國替となれり。五百石以下の家臣は元屋敷に住し、村々の郷士皆自家に居る。後に至り岩城家の士分鳥居家へ御預となり、今の本郷北目村の内開發御茶園地七ヶ所に住み、農商に下りても士格の扱ひを受け着袴帶刀を許され、平城主安藤家にまで至りぬ。前述の七ヶ所とは久保町、胡麻澤町、北目町、梅香町、立町、菩提院町、新町なり。梅香町に義家公幌掛の松と稱し、三反五畝歩の除地あり、是八幡太刀持弓持分と唱ひ五石の除地あり、又姥が清水といふ所あり、是は老婆が義家公に清水を獻じたる故に名づけらる、明治元年頃迄は井戸側の姿を存したりき。

金物商坂田商店
磐城平
貳町目

荒物小間物
砂糖石油
米澤銘酒
磐城原町
金田屋商店

眼科專門
徴兵適齢者并ニ學校生徒ニハ治療料輕減ノ規定アリ
殊ニ貧困者ニハ無料ニ治療ノ規定アリ
磐城平町紺屋町
中島眼科院

雜誌大取次販賣　平町字研町　注文本商店

磐城工業界

磐城炭鑛株式會社（一）

（一）常磐炭鑛界の覇王

磐城常陸の兩國に跨る大炭田によりて、礦業を營む會社は十數個所の多きに達し、投下せられたる資金は千萬圓を超え、從事する人員又萬を以て算すべく、實に東北工業界の一大偉觀たり、而して此多數會社の間より嶄然として頭角を拔く者を磐城炭礦株式會社とす、磐城炭礦株式會社は實に常磐炭礦界の覇王にして、礦區の廣大、人員の多數、出炭量の巨額、器械の嶄新、資金の豐富、坑夫對遇法の完備等、孰れの點に於ても他會社の企及し難きものあり、單に礦區のみに就て見るも、入山は百四萬、王城は四十五萬、三友は十四萬坪に過ぎざるに、磐城は三百七十一萬坪を有す。礦區の大は以て他を推し得べければ、多くの比較を掲げず、吾人は進で同會社の採炭狀況を語らんと欲す。

（二）內郷炭鑛

同會社は內郷小野田の二大礦區を有す。就中大なるものは內郷炭礦にして、石城郡內郷村大字宮より好間村大字上好間に亘り、面積三百萬餘坪あり、平及び湯本へ一里餘を距る所に在り、海岸線驛と炭礦との間には會社の專用鐵道ありて、交通運輸の便備はれり。

イ　沿革

舊記の存せざるため、往古の事は詳しく尋ぬる能はざれども、口碑に依れば數百年前に發見せられたるものゝ如く、昔は夜間町默の出で來りて作物を踏荒すを防がんため畑畔に焚きたるに過ぎざりしが、今より五十年前に至り、大森平藏なるものあり、農を家業とせしも亦深く商業に注意し、數々江戸に往復せしが、白水に於て炭層の露出せるを發見し、之を港灣に搬出して汽船の燃料に供せば、利益莫大ならんと思ひ、馬に馱して小名濱に出せしが、明治二三年頃道路漸く開けしを以て車を用ひ、十年には荷馬車にて運搬するに至れり。此間礦業に志す者漸く多く、白水不動澤を始めと、鬼ケ澤熊掛田谷澤の諸炭山相次で起り、十七年小野田炭山に於て始めて洋式動力を用ひ、廿七八年に至り今日の基礎を造れり明治廿九年試錐をなして略炭層の調査を遂げ、三十一年竪坑及び斜坑の開坑に着手せしも、炭況不振のため時々事業を中止し、三十一年十一月內郷專用鐵道の成るに及びて斜坑の採炭を始め、竪坑は三十四年五月落成し、翌卅五年七月兩坑の貫通せしより以來、年々擴張せられて、三十八年上半期には一ヶ月三千五百萬斤の採炭をなし得しも、五月に至り竪坑內に出水ありしため一時全坑を埋沒せざるべからざる不運に會したるが、卅九年十一月揚水を終り、又從前の如き出炭量を見るに至れり。開坑以來每年の出炭量は左の如し。

三十二年　七百四十六萬斤
三十三年　七千百九十八萬二千斤
三十四年　一億六百十九萬一千斤
三十五年　三億二千二百十三萬七千斤
三十六年　二億四千二百十七萬九千斤
三十七年　三億五千七十一萬一千斤
三十八年　二億二千百九萬二千斤
三十九年　九千五百十八萬斤

ロ　一般の概況

層厚は上層六尺本層七尺下層二尺にして、上層本層間は百尺乃至百十尺本層下層間は六尺乃至十尺を距て、層厚は一定して適度の傾角を保ち、走向二哩傾位一哩、長方形をなす良礦區にして、採掘上の便宜を有することに於ては磐城炭田中第一に位す。

上層炭は厚さ平均六尺ありと雖も、著しく夾雜物を含み、且つ多量の硫化鐵を含有するを以て炭質劣等なるも、本層炭は厚さ七尺乃至八尺ありて夾雜物も少く頗る佳良なり、下層炭の厚さは二尺あり。三層とも炭質は非濃青にして骸炭製造に適せず、其色少しく茶褐色を帶びて光澤渺し、本層炭分析の結果は左の如し。

水	六、〇七
揮發物	四三、四六
灰	八、八四
硫酸	二、一五
比重	一、三五
勢力	四七五九カロリー

目下使用しつゝある排水原動機は
ランカシャー汽罐　十臺（三百七十七馬力）
ユルッシュ汽罐　二臺（七十二馬力）
にして、運礦原動力としては、
直動式雙汽箱　二臺（三百五十馬力）
キアー式同　二臺（二百馬力）
同式單汽箱　一臺（十五半馬力）
を使用し、一日の運礦量は千四百四十車（百十五萬二千斤）にして最近一ヶ月の出炭高は三千二百八十八萬斤に達す。又撰炭原動機にしては、單汽箱無凝式二臺（四十五馬力）を用ひ、撰炭夫男子五人女子七十八人撰炭車夫百三十五人を使役し、一日平均撰炭高塊炭一千九百萬斤、粉炭一千二百萬斤に及ぶ、塊炭と粉炭との比は六と四なり。

使用人員は合計千六十五人にして、其職業別は左の如し。

堀進夫	三一	採炭夫 二八九
后山夫	二〇八	運炭夫 九二
撰炭夫	八三	支柱夫 四三
軌道夫	六	坑內雜夫 一一八
坑外雜夫	一一五	火夫 三五
運轉夫	四五	職工夫 四五

右の外職員百十四人あり。

石城郡の統計

（一）現住人口

村名	男	女	計
泉	一、九一六	二、〇〇八	三、九二四
渡邊	一、〇〇七	九二六	一、九三三
鮫川	一、九五七	一、八二八	三、七八五
山田	一、四三九	一、三七九	二、七七六
錦	一、五九五	一、三〇三	三、〇三四
窪田	二、三三四	二、三六六	四、七〇〇
上遠野	一、七四五	一、六七七	三、四三一
人遠野	一、五二四	一、四六七	二、八九一
川邊	一、一九四	一、一六三	二、三五七
田人	一、〇四五	一、〇七四	二、一一九
荷路夫	二、一一一	一、七八	三八九
貝泊	一七一	一五八	三二九
石住	一二一	一三二	二五三
平	六、八一六	六、一一九	一二、九三〇
飯野	一、四六〇	一、四二八	二、八八八
夏井	一、四一七	一、三〇一	二、七一八
高久	一、二四四	一、二三八	二、四八二
豐間	一、五〇二	一、五二六	三、〇二八
江名	一、八七九	一、八三〇	三、七〇九
鹿島	九九八	九二二	一、九二〇
小名濱	二、九〇九	二、七九五	五、七〇四
玉川	一、一四八	一、一六二	二、三一〇
磐崎	二、一三六	二、〇六一	四、一九七
湯本	一、五三一	一、五七一	三、一〇二
內郷	三、〇九八	二、五二二	五、六二〇
間	一、五一〇	一、三九五	二、九〇五
如井	一、一一六	一、〇九九	二、二一五
赤	九四八	八七二	一、八二〇
永戸	六〇三	五六六	一、一六九
輪	笠	九九三	二、〇三七
阪	三、〇四四	二、〇三四	五、〇七八
澤	一、一七	五五七	一、一七四
渡	一、六一八	一、六二八	三、二七六
谷	一、六四八	一、九八二	四、〇八六
神	二、一〇四	一、八三三	三、六七六
草	一、八四三	一、七五五	三、六〇〇
野	一、六七一	一、五七七	三、二四八
浦	一、五一一	一、四〇九	二、九二〇
倉	一、八四五	一、六三一	二、九七四
野	一、〇四四	一、〇七四	二、一一九
田	一、一七八	一、一五八	三二九
大	一、一二一	一、一三二	二五三
平	六、一一九	六、一一九	一二、九三〇
窪	一、四二八	一、四六〇	二、八八八
下川	一、六七四	一、三〇一	二、七一八
小川	八二七	一、二三八	二、四八二
上川	七三〇	一、四三九	一、七三七
前	八七八	八五九	一、七三七
計	六、一〇八	六、四八七	一二、五九五

備考、以上は昨年末の調査に係るが故に現時は更に增加したる者も多かるべけれども大體は前表によりて知ることを得可し

寶好間鑛泉

內務省免許

內服用主治効能

◎內服

一慢性腸胃加答兒　一淋疾　一慢性下痢
一慢性氣管支加答兒　一虛性の出血　一白帶下

一扁桃腺炎
一眼病にも効驗あるべし　一咽喉の炎症（含嗽）

本泉は綠礬含有の明礬泉に屬するを以て染色家の媒染劑に適す
御試用からんことを乞ふ又婦人の御齒黑染にも宜し

定價　四合瓶金廿錢　二合瓶金拾錢

特約販賣取次御約定仕る可く候甘酸澁の三味あり水と砂糖とを入るれば葡萄水の如し

尙は本泉は清酒を等分に入るれば純良なる清酒となるべし

福島縣石城郡平町
發賣元　玉泉堂　田村幡太郎

繰綿新聞店　三國新聞店　小名濱新聞店　泉新聞店　植田川島新聞店　來安島新聞店　平潟小松新聞店　磯原木本新聞店

教育會

改正令實施後の平小學校（下）

（二）四十一年度より全部實施の場合

四十一年度より直に尋常科六學年を設くるとせば、現時の高等科一學年生を以て編制することなれば、則ち尋常科に廿四學級高等科に四學級、合せて廿八學級となるべし而し四十二年度より人口增加に伴ひ、每年尋常科に二學級增すべければ、其後の學級數は前項に述べたる數と同じである。此法は學年の稱呼、授業科徵集等、總て復雜に渉るの憂なきを以て、取扱上頗る便宜の設立を希望する。

之を要するに、當校は目下の所村部、この關係もあれば、双方協議の上でなければ決定し難いが、地方的關係より慨るときは、先づ村部に於て高等小學校の代りに農業補習學校を設け、高等科の兒童は平町に委托して教育を受けしめ、平町では夫がため格別の設備を要するものでないから快く之を收容し、一面商家の子弟をば商業學校に入らしむる方法を取た方が、將來のため大に有益な事と思ふ（中根平小學校長の談）

町村長訪問記

◎なほ一つ湯本の缺點は、總て、の組織が金持のため、中流以上の者の爲めに出來てある事で、地方の農夫などが其閑を利用して入浴に來るように、簡便手輕に往く設備が無い事と、數でコナスことができないのは、湯本人の自ら招げる大不幸である、

◎火災の被害は約十萬圓であるが、復旧費は十五萬圓以上を要するだろう、復旧工事は九月中旬頃迄には大概終ると思ふが、災害の傷痍が全く癒ゆるには數年かゝる。

◎溫泉組合が有て湯本の發展法を講じて居るが、是迄やつたのは、昨年東京の新聞記者三十餘人を招いた事と、溫泉の整理均衡であるが、人民は少しも念頭に掛けぬ。之を要するに、當校は目下の所村部この關係もあれば、双方協議の上でなければ決定し難いが、地方的關係より慨るときは、先づ村部に於て高等小學校の代りに農業補習學校を設け、高等科の兒童は平町に委托して教育を受けしめ、平町では夫がため格別の設備を要するものでないから快く之を收容し、一面商家の子弟をば商業學校に入らしむる方法を取た方が、將來のため大に有益な事と思ふ（中根平小學校長の談）

磐城平吉田禮次郎謹製　壹週間分七貼入金貳拾五錢

吉田家傳ぢのくすり

いぼぢたつこぢはしりぢむねのはりかみのけのぬけかずもゝのいたみめのたゞれ痔病一切によし

縣下大取次　郡白河　二本松　三春

白河	根本祐太郎
松井平助	須賀川 伊藤喜一郎
藤井德次郎	本宮 若井屋安松
木村忠助	福島 小野新町 藤田治郎次
	富岡 山口保命堂
	原町 小林順生堂
	小高 林治郎兵衛
	浪江 郡豐太郎
	鹿島 只野元藏
	中村 新妻重富
	小高 楢屋藤八郎
	新山 佐々木安之助
	久之濱 白石屋久太郎
	四倉 新妻盛
	平 佐々木節次郎

亀

煙草元賣捌所
釜屋堀過燐酸肥料
販賣
磐城平町二丁目
中野支店

太物卸
磐城平町三丁目
中野支店
振替貯金口座三七一八

煙草元賣捌所
釜屋堀過燐肥酸料
石城郡一手販賣

教育會

改正令實施後の平小學校（下）

（二）四十一年度より全部實施の場合

四十一年度より直に尋常科六學年を設くることせば、現時の高等科一學年生を以て編制することなれば、則ち尋常科に廿四學級高等科に四學級、合せて廿八學級となるべし而し四十二年度より人口增加に伴ひ、毎年尋常科に二學級增すべければ、其後の學級數は前項に述べたる數と同じである。此法は學年の稱呼、授業科徵集等、總て復雜に渉るの憂なきを以て、取扱上頗る便宜であるが、從來高等科に通學區域內の各村部に於て、四十一年度より直に六學年迄設置するに非ざれば、實施する事ができない。だろう。何となれば當校に於てのみ實施する時は、一旦收容せし村部の兒童をして、一時就學の途に迷はしむるに至るから、先づ第一の法に據らればなるまい、

（三）高等小學校修業年限及商業學校

小學校令第十八條を、「高等小學校の修業年限は二個年とす但し延長して三個年となすことを得」と改正せられ、高等小學校の修業年限は二ケ年を以て一般を認められたるが如し、然らば當町に於ける高等小學校の修業年限は如何に定むべきかといふに、先づ二個年を以て適當と認める。何となれば、二個年以上就學し得られる境遇に在る者は一歩進んで男子は中學校に女子は女學校に入るの便宜があるから、三學年を設けて僅の兒童を收容するよりは、其費を轉じて商業學校（乙種）を設置し、義務教育を終へたるものをして、進で中等教育を受くる者は中學校に、然らざる者は高等科或は商業學校に入學せしむるは、實際的で頗る有益なる方法と信ずる、されば改正令に據る高等小學校一學年を設くると共に、商業學校の設立を希望する。

之を要するに、當校は目下の所村部この關係もあれば、双方協議の上でなければ決定し難いが、地方的關係より觀るときは、先づ村部に於て高等小學校の代りに農業補習學校を設け、高等科の兒童は平町に委托して教育を受けしめ、平町では夫がため格別の設備を要するものでないから快く之を收容し、一面商家の子弟をば商業學校に入らしむる方法を取た方が、將來のため大に有益な事と思ふ（中根平小學校長の談）

町村長訪問記

（一）湯本村長　長壽男氏

◎八月五日午前八時半、湯本村役場に往いて長壽男氏を訪ひ、湯本に就て知らんとした。氏は頗る外交的辭令に巧みなので、事實の精を得るには大に困難で有たが、先大要左の如き事實を知り得た、

◎湯本の生命は溫泉と炭礦とで、旅館、商店も炭山に關係ある者と、溫泉入浴者とによりて其業を營んで居る。昨年末の調査によれば一ヶ年間の投宿者は、一萬餘に達してあるが、半は炭礦會社員、石炭商人其他石炭に關係する人々で、他は殆んど浴客である、

◎過去に於ける湯本の失敗は、溫泉を濫用した事である、何れも自己の便宜を增さんために濫りに開鑿したので、今や浴槽への供給も不十分となり、共同浴槽も造ることができず、地方人自らが非常に不利益を被て居る。

◎又、今日湯本の憂とする所は、溫泉の前途である、昨年より湧出量が著しく減少した、今後附近の炭礦が開掘せらるゝに從て、或は溫泉の湧出が全く止まるかも知れない、これは湯本の將來に取て由々しい大事であるが、人民は少しも念頭に掛けぬ、

◎なほ一つ、湯本の缺點は、總て、の組織が金持のため、中流以上の者の爲めに出來てある事で、地方の農夫などが其閑を利用して入浴に來るように、簡便手輕に往く設備が無い事と、數でコナスことができないのは、湯本人の自ら招げる大不幸である、

◎火災の被害は約十萬圓であるが、復舊費は十五萬圓以上を要するだろう、復舊工事は九月中旬頃迄には大概終ると思ふが、災害の傷痍が全く癒ゆるには數年かゝる。

◎溫泉組合が有て湯本の發展法を講じて居るが、是迄やつたのは、昨春東京の新聞記者三十餘人を招いた事と、溫泉の整理均衡分配をなした事とに過ぎぬ、組合長は長壽男氏で、幹事は鯨岡半彌鈴木卯之助の二氏百七十餘の組合員が有る。

◎目下約二百名の大工左官が夜を日について健築に急いで居るから、遠からず火災前よりも遙に立派な町となろう。

◎以上は記者の問に對する、氏の答である、記者は更に浴客を多く集めるための廣告法や、久しく留て倦まざらしめる遊覽地の設備、新聞雜誌縱覽所の設置等に就て問ふたが、考ひ中であるとの外に聞くを得なかつた。

◎思ふに湯本の覺醒を要するのは今日であろう、入山炭礦第四坑が其採炭を終た後、溫泉がもたらす所の結果は如何、百年の後石炭の產出止みたる時、湯本は如何なる客人によりて其商業を續くるか、富豪紳士のみを相手とする現在の設備は、永遠に湯本の繁榮を保つ方法なるか、是れ對岸の火災的閑問題ではあるまい十年の後百年の後如何なる運命に見舞はるゝかを思ふて、湯本人の一大覺醒をなすべきは、實に今日ではないか。

◎吾人の湯本村長を訪ふて、聞きたる所、感じたる所は、僅に以上の如きものに過ぎなかつたのである。

舊記の存せざるため、往古の事は詳しく尋ぬる能はざれども、口碑に依れば數百年前に發見せられたるもの、如く、昔は夜間町獸の出で來りて作物を踏荒すを防がんため畑畔に焚きたるに過ぎざりしが、今より五十年前に至り、大森平藏なるものあり、農

イ沿革

三十七年　三億五千七十一萬一千斤
三十八年　二億二千百九萬二千斤
三十九年　九千五百十八萬斤

ロ一般の概況

層厚は上層六尺本層七尺下層二尺にして、上層本層間は百尺乃至百廿尺本層下層間は六尺乃至十尺を距て、層厚は一定して適度の傾角を保ち、走向二哩傾位一哩、長方形をなす良礦區にして、採掘上の便宜を有することに於ては磐城炭田中第一に位す。

磐城平吉田禮次郎謹製
吉田家傳ぢのくすり
壹週間分七貼入金弐拾五錢
いぼぢたつこぢはしりぢむねのはりかみのけのぬけからぶくのいたみめのたゝれ痔病一切によしと

縣下郡山取次
白河　根本祐太郎
二本松　松井平助
三春　藤井德次郎
木村忠助
須賀川　伊藤喜一郎
本宮　若井屋安松
小野新町　藤田治郎次
福島　山口保命堂
白河　井上敏
原町　小林順生堂
小高　林治郎兵衛
浪江　郡豊太郎
鹿島　只野元藏
中村　新妻重富
小高　植屋藤八郎
富岡　菊地喜久雄
新山　佐々木安之助
久之濱　白石屋久太郎
四倉　新妻盛
平　佐々木節次郎

煙草元賣捌所
釜屋堀過燐酸肥料
販賣
磐城平町二丁目
中野支店
太物卸
磐城平町三丁目
中野支店
振替貯金口座三七二八
煙草元賣捌所
釜屋堀過燐肥酸料
石城郡一手販賣
中野支店
磐城平町新川町

砂糖問屋
和洋粉問屋
大日本製糖株式會社特約販賣店
平町新川町
吉田屋定太郎

內外科、產科、婦人科
小兒科、皮膚病、梅毒
磐城平町字南町
根本醫院
◉入院患者隨意自炊セラルベシ

后山夫	二〇八	運炭夫	九二
撰炭夫	八三	支柱夫	四三
軌道夫	六	坑內雜夫	一一八
坑外雜夫	一一五	火夫	三五
運轉夫	四五	職工夫	四五

右の外職員百十四人あり。

上遠野	一、七四五	一、六七七	三四三一
人遠野	一、五二四	一、四六七	二、九九一
川邊	一、一九四	一、一六三	二、三五七
田人	一、〇四五	一、〇七四	二、一一九
荷路夫	二一一	一七八	三八九
貝泊	一七一	一五八	三二九
石住	一二一	一三二	二五三
平	六、八一六	六、一一九	三、九三〇
飯野	一、四六〇	一、四二八	二、八八八
夏井	一、四一七	一、三〇一	二、六七一八
高久	一、二四四	一、二三八	二、四八二
豐間	一、五〇二	一、五二六	三、〇二八
江名	一、八七九	一、八三〇	三、七〇九
神谷	一、六二二	一、六四八	二、二七六
草野	二、一〇四	二、一〇四三	一、九八二
大浦	一、八四三	一、八三三	三、六七六
四倉	一、八四五	一、七五五	三、六〇〇
大野	一、六七一	一、五七一	三、二四八
平窪	一、五一一	一、四〇九	二、九二〇
下小川	八四七	八二七	一、六七四
上小川	七三〇	七〇九	一、四三九
前川	八七八	八五九	一、七三七
計	六一、一〇八	五、四八七	二九、五九五

備考、以上は昨年末の調査に係るが故に現時は更に增加したる者も多かるべけれども大體は前表によりて知ることを得可し

いはき廣告取扱
綴本柏木ヤス　金澤茂吉　湯本　小名濱小濱長太郎　植田川島商店　富岡菊池喜久雄　四倉新妻正意

地方時事

（自四月十四日至八月十日）

平町

△町村長例會　七月十五日午後三時より石城郡役所樓上に開會、徴兵事務、戰利兵器頒布、社寺合併、耕地整理、桑園肥培、養豚奬勵、產業組合設置等の件に就て郡長の指示あり。十六日も亦引續きて開會、明年の共進會出品、改正小學校令實施の諸伴に關し、郡長の諮問ありたり。

△育英會發起人會　七月十六日午後一時より磐城中學校内に開催、會衆百餘名、高宮尙二氏設立の旨趣を述べ、夫より役員の選擧に移り、會長高宮尙二、副會長成田直忠、其他幹事、評議員、理事等を推選し、十月に總會を開く事を決したり。

△石城郡醫師會　七月廿日午後三時より平町住吉屋本店に發會式を擧げ、會する者四十四名、役員選擧及び規約の締結をなす。

△水道調査　平町吏員及び町内有志者廿餘名は廿二日水路の實地踏査をなしたるが廿三日は午前九時より町會を開きて水道敗設案に就て協議の末十一名の委員を擧げて調査をなすことゝし選擧の結果左の諸氏當選

横内直溫　山崎與三郎　鈴木堅助　吉田禮次郎　廣瀨銑一郎　堀江正直　眞木隆四郎　新田目善次郎　佐藤文拙　青木智音

△矯風演說會　七月廿三日午後七時より平町聚樂館に於て開會、石川德太郎、北鄕保守、坂本儀助の三氏の簡單なる演說ありたる後、郡新聞主筆田川大吉郎氏に『善風良俗の維持』に就き、政友會總務委員江原素六氏は『公娼に對する余の意見』と題して、熱心に演說し、千五百餘名の聽衆に深き感動を與へたり。

△活動幼燈　少年世界編輯人神保直藏氏一行の活動寫眞幼燈曾は七月廿六日午后六時より聚樂館にて開會、少年學生入場者如山

四倉町

△巡査賞與　四倉分署巡査渡邊軍平（金一圓）青柳亥之吉（金六拾錢）鳥居春樹（同）阿部德治（同）田添清太郎（同）は十四日其筋より賞與せられ、鳥居春樹（金八十錢）五十嵐三吉（同）高久三津治（同）の三氏は十七日賞與せらる。

△鈴木少尉の拘引　四ツ倉町出身にして歩兵第廿九聯隊附なる少尉鈴木英二は同隊被服委員を勤め居りしに監守盜の嫌疑により仙臺憲兵分隊の手にて拘引されたり。

夏井村

△木盃の下賜　大字菅波箱崎庄助氏は、亡祖父の遺言に依り、昨年中同村學校基本財產として金五十圓を寄附したるにより、七月十七日、本縣知事より本杯一組を下賜せられぬ。

内郷村

△坑夫の轢死　宮炭礦坑夫眞柄秀八郎は坑外に出でんとする際、誤てケージと横道との間に足を踏み外し、百二十尺の坑底に直下墜落して轢死を遂げたり（七月十七日）

△耕地整理竣工式　大字小島にては七月廿一日午前十時より耕地整理竣工式を擧げたるに、郡村吏、村内有志者等出席者頗る多く、烟火の餘興などありて非常の盛況。

△株主總會　入山炭礦株式會社にては廿五日株主總會を開き、當期の決算報告をなしたるが、純益金十九萬六百四十九圓餘にして、二割の配當をなすことに決定せり。

町村吏員の名譽

町村費決算を法定期限内に結了したる廉を以て徴稅事務成績表彰規定により知事より表狀交附の名譽を負へる町村吏員中本郡の分は左の如し。

鹿島村長、山口入、同助役、鈴木大藏、同收入役、吉田萬次郎、泉村長、道見繁、同助役、佐藤丈之助、同收入役、田子德治

猶尙岸三郡中徴稅事務の成績最もよきは

石城郡、鹿島村、泉村、神谷村、玉川村、飯野村、湯本村

雙葉郡、長塚村、郡野村、久之濱町、大野村、大久村、請戸村

相馬郡、磯部村、八澤村、眞野村、新地村、福田村、八幡村、上眞野村、大野村、石神村、太田村

等の諸町村なりといふ。

石城郡酒造組合

△石城郡酒造組合は明治三十三年二月の勅令に基きて組織したるものにして、當初は九十名の會員を有し、小野定太郎氏（小名濱）組合長となり、永山泉七郎氏（飯野）副組合長を勸め居りしも、其後會員は漸次減少して今や殆んど半數となれり。

△會員の減少せるは、一は酒造業をなすよりも他の事業に利益多きを認めて轉業せる者あると、一は酒造業失敗のため廢業せる者あるとによる。酒造業失敗の第一原因は稅金の多きがためにして、資力乏しき者は稅金調達のために競爭濫賣をなし、收支償はずして倒產するに至れるなり。

△組合にては此の惡弊を防がんと欲し、規約を制定して嚴重に厲行し、評議員會にて定めたる價格によりても販賣するとゝなせしより、事業の根抵漸く堅固となり、近來は利益も多くなり、營業も發展し、聲價亦高くなれり

△二三年以來工業の勃興に伴ひ、人口著しく增加したるを以て、酒類の需用多くなりしため、酒造業も自ら發展を促がされて、昨年度の產額は一萬六千石に過ぎざりしが本年度は二萬石に達せんとするに至れり。

△酒造業は年々發達し來れるも、なほ郡内の需用を滿たすに足らず他縣より輸入する酒類數千石に及べり、自下最も多く消費するは平町にして、諸炭山之に次ぐ。

△組合員中最も斯業に熱心なるは、太平左司馬（磐崎村）古川德三郎（鮫川）馬目留吉（内郷）小野賢司（小名濱）等にして會員は左の如し。

永山泉七郎、山崎造酒太郎、鈴木茂平、叶多鉾治、永山和平、四家又兵衛、松本七郎治、松本三郎治、木口照保、熊谷彦平、草野千太郎、松本政治、吉田至誠、永山龜太郎、酒井良平、愛川茂兵衛、石井金之助、瀨谷勇助、渡邊イチ、鈴木兵右衛門、箱崎淺吉、大友金次郎、本間金吾郎、鈴木兵十郎、矢吹清五、大谷與兵衛、鈴木嘉兵衛、志賀久作、阿部源兵衛、志賀友次、佐原久道、吉原與兵衛、近藤彌作、立花典次郎、小野賢司、草野良太郎、小野定太郎、柳内芳之助、古川德三郎、鷲清吉、森林平、正木次郎兵衛、赤津小四郎、大平兵助、根本茂吉、東陽酒造株式會社、馬目留吉、高萩甚三郎、大平左司馬、御代武兵衛、熊谷岩五郎、櫛田百太郎、佐々木庄太郎

はがき集

△假令乞食人でも六十近い老人をそう殘酷に打擲すると、は感服しない（御巡公）△オイ親方いくらお金を貯めたいからとて弟子共に碌々喰はせもしないでは後々の爲にはならぬぞ（撥槌小路）△○○さんの藥罐からひどく湯氣がたつので其原因を調査して見たら時節柄ひど〳〵熱して居たのであつた（水道敗設熱）△おい○さん○うさんおきゝ○さんおば○さんこの五人はのどらく女であります（二三町目）△新田町の中やの○○は僕に肱鐵砲を喰はした（丸ポチヤ）△平驛の踏切番には嫌な目付をする人があるのねえ（通行女）△平の氷水屋では砂糖を呑むのでどうも旨くない（旅行人）△平松さんに一本やられた時の成田さんの御顏は見物だつたよ（一區長）△お父さん御金を下さい公娼を買ひに往きますから（せがれ）

平町停車場前
北鄕内外科醫院

和洋御菓子
磐城原町
石田屋本支店

吳服太物
荒物砂糖
磐城原町
田村商店
洋小間物

黴毒痲病膀胱病小兒病專門
双葉郡長塚
石川醫院
平町白銀町（石島別邸）
石川醫院平出張所

文藝

丹摺雲

行く春の雨に崩るゝ緋牡丹や驕奢の果の運命に似たり　菊地珠郷（平）
暗緑の冷めたき光さゆらぎて神秘めきたる五月雨の森　同　八
白蓮花そゞくづれたり魔の神が滅亡の譜を誦し終るころ　柏木哲村（湯本）

俳句

題　朝顔　初秋

朝顔や馬に較べく玄關前　聞響（平）
ふいと今朝秋の見え透く靡哉　同
朝顔も我家も千代の釣瓶哉　同
初秋や波に搖るゝもやい船　同
秋立て寢覺淋しき露營かな　殘月（向）
初秋や青田十町風そよ〳〵　如雪（植田）
避暑地より便來日や秋立ぬ　同
朝顔やまだ消殘る星ひとつ　同
初秋や枯梗手向くる母の墓　新海（四倉）
初秋や新給きてむしを聞く　同
初秋の心しづかや桐ひと葉　正靜（平）
朝顔や今咲てほし月のかき　同
蕣の客に旅次のめさめ哉　梅里（平）
初秋や娜娜にくるせんの蟲　同
虫の音に心すみゆく庵かな　寒月（小野田）
蕣やし出し浮世はしづかも也　同
初秋の露のみ餘りこぼれ兔　風草（平）
蕣や這はせて見たき琴の上　同
初秋や旅商人のだそがるゝ　白水（入山）
初秋や今朝竹椽の踏にゝろ　紫水（平）
芋の葉の露に初秋こぼれ兔　同
初秋と云ふより風の輕み兔　同
朝顔や露にはりなき花の艶　同
朝顔や露のひぬまを一盛り　同

平町公娼問題

世の沙汰を吹散し兔秋の風　正靜（平）

夏　雜題

馬洗ふはだか男やくもの峯　如雪（植田）
盆踊村中留守となりにけり　波樂（草野）
椽側の水汲桶やなつのつき　同

狂句

題　畫寢　落書

妾宅は畫寢本宅は玉のあせ　（の字（小野田））

狂歌

○　五坊忍人（平町）

朝な夕な骨は折れても機嫌よく
稼ぐうちわの中ぞうつくし
山も積む金にはふれぬ我肌を
にくやチクリと蚤のいたづら
遠慮して水に戻すなもてなしの
あつき心をこめしこほりに
不景氣にとまりし蟬の聲聞けば
一圓さつのかほもみん〳〵
川ならで涼風通ふ流しもと
下女はしきりに舟漕で居る

次號課題　七月十日〆切

俳句

天の川　辻角力

狂句

尊　立聞き

狂歌

題隨意

其他何種類にても歓迎いたすべし

添乳して嫁は畢なき畫寢をし　同
落書の初字と繪の中を往き　同
落書は消しても消ぬ顔の泥　同
鼻持もならず便所へ書た奴　同
辻々へ示威運動のらく書し　玉泉（平）
落書で行商人の跡が知れ　同
夜渡世あさねの上に畫寢をし　同
落書の説明母は大こまり　俗物（相馬）
畫寢と居る間にお三ひかはる　同
髯殿の惡口もあるくらの壁　凡骨（富久）
黒々と髯いかめしき畫寢哉　克位（草野）
恭しく四書を枕の畫寢かな　同
落書は顔は畫寢の證據なり　柳卷（平）
長松も髯はやしてる畫寢哉　愚佛（平）

柳川春葉著

小説　春葉集

●定價金四十八錢
●郵税金六錢

春葉先生が文壇に於ける名聲は世すでに定評あり本書は先生が傑作數篇を寛めたる者にして一讀神氣を爽快ならしむる銷夏の好伴侶なり

東京日本橋區馬喰町三丁目　今古堂書店

平町醫師（イロハ順）

内外科産科　市原卯太郎　搔槌小路
梅毒膀胱病　麻病小兒科　石川玄碩　白銀町
内外科小兒科　羽岡平三郎　田町
内外科　根本莊次郎　南町
同　渡邊寅次郎　搔槌小路
眼科　賀澤忠治　南町
内外科　神尾精一　搔槌小路
眼科　中島達四郎　紺屋町
内外科　村上則祐　南町
同　草野萬吉　白銀町
同　松村高知　南町
同　酒井國三郎　南町
同　齋藤龍安　研町
同　城戸泰修　一丁目
同　城戸立敬　一丁目
同　北郷保守　白銀町
同　新宮新太郎　搔槌小路
眼科　清宮嶽之助　五丁目
内外科　鈴木壽一　四丁目

團扇扇子
略暦臺紙問屋
蜜柑

●四十一年度名入暦御注文の節は●
●精々勉强貴需に應ず可く候●

東京日本橋區堀江町二丁目二番地
電話浪花二二一七番
電報（ヤ）

金大和屋商店

移轉廣告

諸國有名賣藥各種
洋酒罐詰和洋雜貨
●純良藥品
●洋酒罐詰
●繪具染料
●著名賣藥
●壁科材料
●齒科材料
●板硝子。塗
●ペンキ。漆
●鑑室消毒
●藥品器械

營業要目

靈活　下りはら止
貴女の水　にきびそばかす取
全滅　一名あせとめ　風田虫水虫藥
ストマック　胃病の藥

磐城平町四丁目
關内藥舗

石城郡湯本表町三丁目座石角
旅館山形屋向

平澤勇

いはき販賣店

四倉新聞店　浪江新聞店　富岡菊地新聞店　小高鴨原新聞店　新山新田新聞店　原町原田新聞舍　中村資成堂　高萩新聞店

諸物果物問屋　夏果物種々入荷

平町四丁目　吉田五郎商店

平町繁昌記

○關内藥舗（四丁目）

華山の商人訓に『十兩の客より百文の客を大切にせよといふ事があるが關内藥舗などはよく此の訓戒に從ふものであろう買物の多少によつて客の取扱に差別を立てず子供でも田舍者でも心して買はれる商品の主なるものは藥品であるが醫料機械も繪具染料も洋酒類なども大抵仕入れである凡ての品物は直接製造元から取寄せて賣るのだから一體割安である主人雅助君はなほ少壯であるから將來の發展は豪いであらう

○中野商店（新川町）

丸龜といへば地方では誰知らぬ者もない大規模の商店で新川町の本店は二丁目の支店と同樣に煙草の元賣捌と釜屋鍋過燐酸肥料の一手販賣を營み二丁目の支店では呉服太物類の卸小賣をやつて居るが規模が大きいだけ取引の範圍も廣く茨城縣の北部から相馬地方に迄及んで居る店員は廿餘名あるが何れも主人勇吉氏の統率に快く服從して他所目にも羨ましい程業務に熱心である

○平鐵工場（掘槌小路）

目下縣社の下に工場の新築をして居る平鐵工場は斯道に造詣の深い由村工長が卅餘名の職工徒弟を督勵して有らゆる金屬器械類の製造修繕をやつて居るが注文が非常に多いので頗る多忙を極めつゝある

○橋本礦業商議所（田町）

橋本旭氏は九州臺灣の諸炭礦及び入山越賀磐城等の諸炭礦にても技術監督の職に在て鑛業には經驗豊かなる人なるが先月中より商議所を開いて鑛山の鑑定測量製圖鑛業施業案の調製鑛山設計鑛山用品鑛區賣買の仲介等を營で居るが土地柄とて依頼者が少くない

○市井評判記

◎一丁目角の山形屋茶舗では此度常陸大津の鐵海産商會と特約し鑵詰類の販賣を始めたが中でもウニの鑵詰などは風味なかなか宜しい

◎四丁目大黑屋の五ちく井一つ六錢とは安直であるさしみも他所の店よりはやすいと云ふ評判である

◎三丁目吉野堂の筆はよく書けるのみならず其壽命が長いので得意が多い

◎四丁目の村上商店は平町第一流の陶器店であるが陶器の外に各地産の塗物もあり銘茶もあり土管や下水瓶なども善いのがある

◎四丁目の吉傳といふ魚屋は有數の問屋で毎日各地に積出す鮮魚も多く鰹節や鹽から干物なども澤山仕入て有て大繁昌である

◎新田町の仲屋では養豚所を新町に設て新鮮な豚肉を有することに於て評判がよいがほかの料理法も上手にやるそうだ

種水油製造
舶來諸石油
炭坑内燈油　販賣店
諸器械用油
磐城平町二丁目
關内市重
（清水屋）

日本石油
賀田石油
特約一手販賣店
株式會社
砂糖石油類
小麥粉卸商
度量衡器販賣店
平町新川町
油屋商店
山下捨吉

和洋銅鐵
板硝子類
金物
問屋
日本セメント株式會社特約店
磐城平町五丁目
釜屋久太郎

海産乾鹽魚
雜穀類品々
荒物乾物商
磐城平町四丁目
菅野屋源三郎
電話（スケノ）（ス）

小泉石材營業所
磐城平町新川町
所長　黑木房教
主任　白土龜吉

（明治四十年五月廿七日郵便物認可第三種）　明治四十年

新聞廣告取扱所　平隊社
東京市京橋區南八丁堀二丁目二十六番地
振替貯金口座七四壹

「いはき」雜誌特約販賣致候ニ付御注文被下度候

定價一部金五錢　外ニ郵税五厘
廣告料　五號活字十九字詰　壹行金拾五錢

編輯人　高木朝重
發行人　吉田禮次郎
印刷人　高城寛雄
福島縣石城郡平町字白銀町六番地
發行所　いはき社

社告

◎前號の社告に掲げしが如く、本社は舊平藩主安藤信正公の詳傳を編みて、幕末に於ける大偉人の寃を雪ぎ、其德を頌するの義務あるを確信す、蓋し公の如きは國家的偉人にして、單に地方人のみの誇りとすべきにはあらじ、然れども親しく大恩を蒙り、久しく德風に親炙したる地方人には殊に深く有する所あるべし、本社は先づ此期の至るを暫く御待ちあらんことを望む。

主張

平町民の品格

藜生

客月廿三日の夜、江原田川兩氏の演說を聽かんと欲して娯樂館に往く。兩氏の博識と熱誠とは、深く感動を聽衆に與ひたるが、殊に痛切なる刺激を吾人に感せしめたるは會場に於ける聽衆の行動なり――熱誠を說會に出づ、會衆の着席終るを見、起てミルを一同に紹介したる司會者が、將に壇を下らんとする時、突如として勞働會幹事の一人は壇下に進み出で、徐ろに口を開いて曰く、吾等はミル先生の高說を拜聽する前に確めたき一事あり、先生は曾て某所に於て、英國の勞働者は世界中最も愚昧頑愚なりと斷言せられしと聞きしが果して事實なりとせば現在も尚當時の如き意見を有せらるゝや、將た前說を改められたりや如何と、之を聞ける司會者は、頗る興深く感じ、今日に至るもなほ忘るゝ能はざる所、近く娯樂館に於ける矯風演說會と相對照して、感慨一層多し。

彼は下等の勞働者にして、此れは中流以上の紳士なり、而して彼には禮儀あり品格ありて、此れには粗野と鄙陋とあり、彼は自己を愚昧なりと評せられて喝采するに、此れは一言の誹りも受けず、たゞ正言臨議の己が耳に快たらざる故を以て、惡罵怒號を逞しうす。工業の勃興商業の繁盛を以て東北の第一位を占むるも、町民の品格無き雅